

【 臓腑間病証(臓腑兼病) I 】

1. 臓腑間病証とは何か

: 2つ或いは2つ以上の臓腑が同時に病理状態にあるもの。

人体の各臓腑は生理機能上密接な関係を持っている。

各臓腑は独自の働きをする事もあるが合同で複雑な生理機能を完成させ人体の正常な生命活動を維持している。故に各臓腑は相互に影響しあう臓腑の失調が他の臓腑の失調を引き起こし、臓腑兼病を引き起こす。

《臓腑兼病の4つのパターン》

- | | |
|--------|--------|
| ① 臓病及臓 | ③ 腑病及臓 |
| ② 臓病及腑 | ④ 腑病及腑 |

2. 注意すべき臓腑間病証の内在法則

臓腑間病証は決して単一臓腑の病証が2つ無関係に存在しているように単純な状態ではなく、臓腑の失調が関連臓腑に影響を与え相互に失調を引き起こしている状態なので、臓腑間の病理上の法則や相互影響の法則に注意が必要である。

* 臓腑間の $\left\{ \begin{array}{l} \text{前 後} \\ \text{主 次} \\ \text{因 果} \\ \text{生克(乗侮)} \end{array} \right\}$ 関係

- * 表裏関係にある臓腑間の臓腑兼病は臨床上大変多い
- * 五臓間の病証には生克乗侮の関係がある場合が多い など

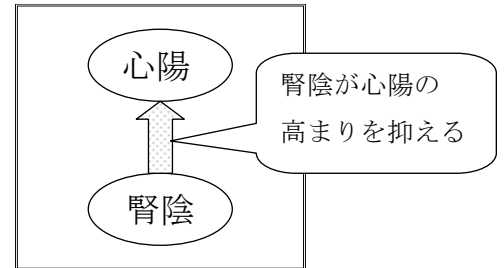
【 代表的な臓腑間病証 】

1. 心腎不交証

： 心腎不交証とは心腎水火既済の失調(水火相済ともいい、水・火に偏りがなく陰陽のバランスがとれた状態をいう)が反映した病態である。

【 生理関係 】

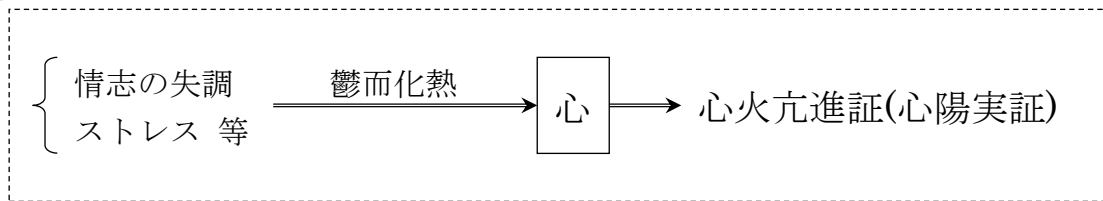
心陽の力は強いため、放っておくと心陽はどんどん亢進してしまう(心火亢進証)。そのため、腎陰が心陽を常に抑制しその亢進を防いでいる。この関係を五行の相互関係にあてはめて水克火、或いは水火既済・水火相済と呼んでいる。



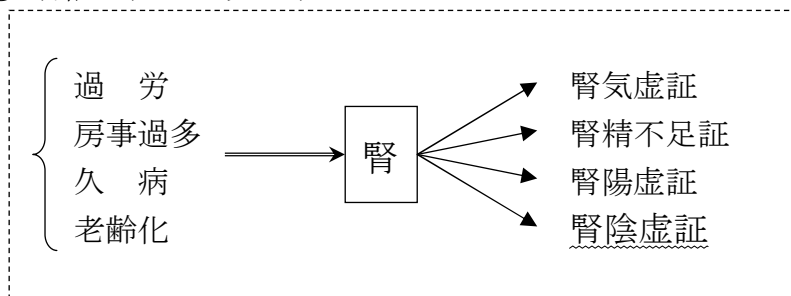
【 病因病機 】

心腎不交証が発生する原因機序には以下の2通りがある。

① 心火亢進証より発生するパターン



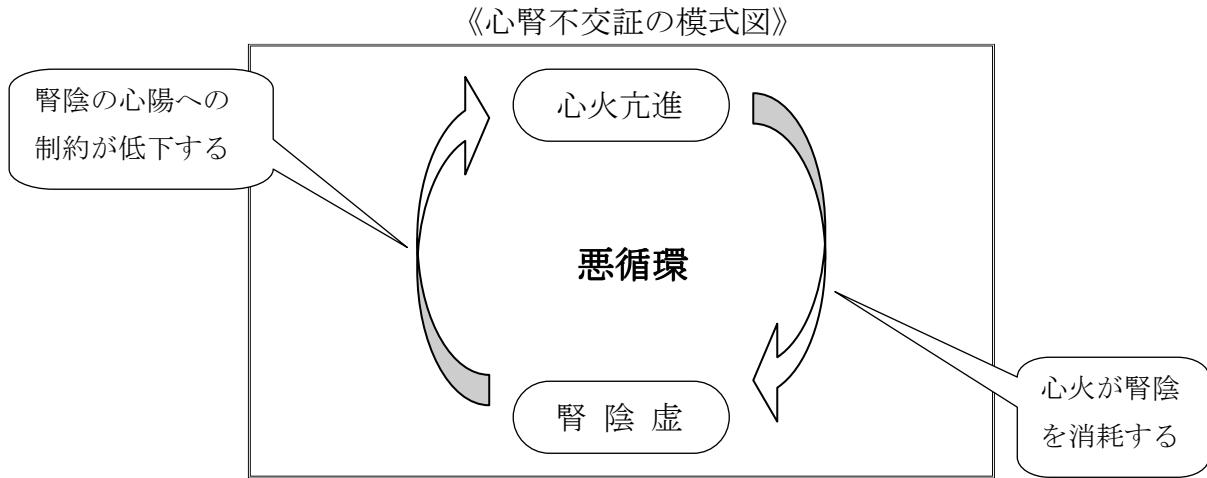
② 腎陰虚証より発生するパターン



* ①のように心火が強くなりすぎてしまったために亢進した心火により腎陰が消耗され(相侮関係“火盛侮水”)、腎陰の力が弱まった事により心火への抑制力が低下し更に心火の力が亢進していく悪循環に陥ってゆく。

②のような腎陰虚に起因するパターンもある。②のように腎陰虚が発生すると心火に対する抑制力が低下し、そのため心火が亢進してしまう。心火の力が強くなると腎陰を消耗してしまい更に腎陰の心火に対する抑制力が低下してしまう悪循環に陥ってしまう。

このような機序で心火亢進証と腎陰虚証が同時に発生している病態を“心腎不交証”と呼ぶ。



【 症 状 】

* 心火亢進症 + 腎陰虚症

: 心煩不寐、心悸、多夢、めまい、耳鳴り、健忘、腰膝酸軟、五心煩熱、潮熱盗汗、
口唇の乾燥、舌紅少苔或いは無苔、脈細数。

《本証の鑑別要点》
心煩不寐、心悸多夢、腰膝酸軟 + 陰虚症状

【 治療原則 】 滋陰降火（、清心安心）

【 処方例 】

	経絡	意義	取穴部位
太谿	腎経	滋陰（滋腎陰）	内果とアキレス腱の間陥凹部
腎兪	膀胱経		第2・3腰椎棘突起間、外1寸5分
三陰交	脾経		内果の上3寸、脛骨内側縁の骨際
大陵	心包経	降火（降心火）	手関節前面横紋の中央
神門	心経		手関節前面横紋の尺側、豆状骨の上際で尺側手根屈筋腱の橈側

* 上記の配穴に随症選穴を加える。

例：心悸・・・・・・・・加 内関
めまい・耳鳴・・・・加 風池・懸鍾 等

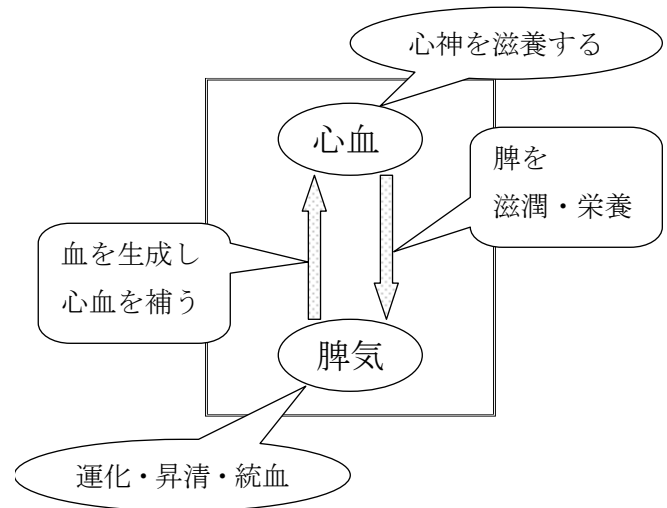
【 臓腑間病証(臓腑兼病) II 】

2. 心脾両虚証 (心脾気血両虚証・気血両虚証)

：心脾両虚証とは心血不足と脾虚気弱が同時に見られる病証で、心神失養と脾失健運・統血の症状が見られる。

【 生理関係 】

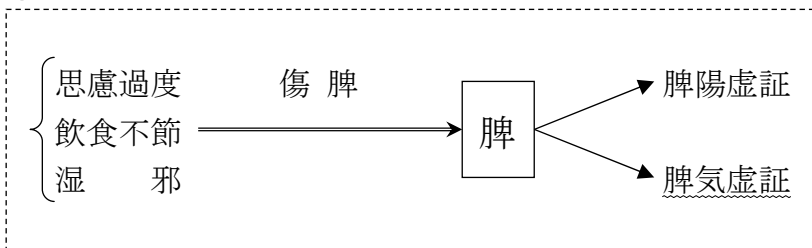
心は五行関係において脾を補う立場にあり、中でも心血は脾を滋潤・栄養する働きを持つ。脾には運化・昇清・統血の働きがあり気血津液の本・後天の本などと呼ばれる。脾の働きにより生成された血は逆に心血を補っている。生理状態において心血と脾気との間にはこのような相互関係が見られる。



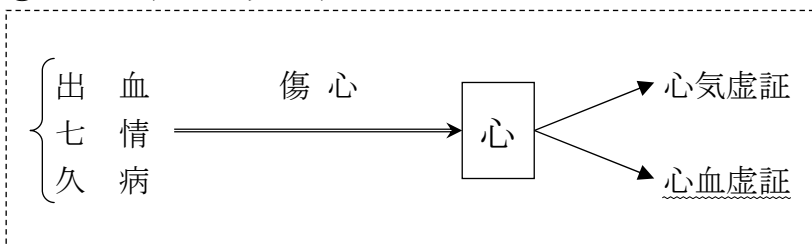
【 病因病機 】

心脾両虚証が発生する原因機序には以下の2通りがある。

① 脾気虚証から発生するパターン



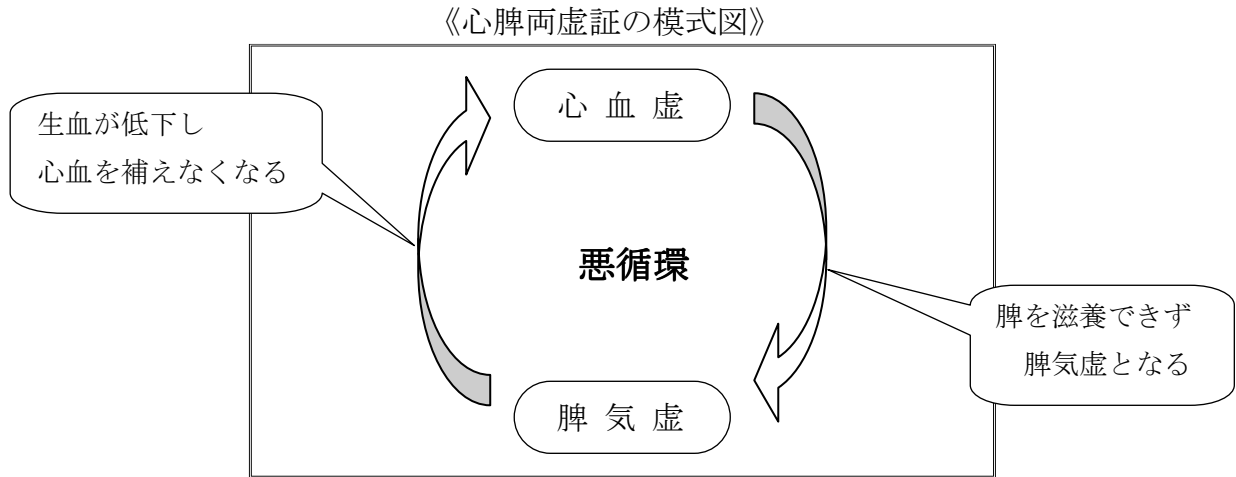
② 心血虚証から発生するパターン



* ①のように脾気虚に陥ると血の生成が低下し、それに伴って心血も不足し心血虚を引き起こす。心血が不足すると脾に対する滋潤・栄養作用が低下し更に脾虚証が悪化する悪循環に陥る。

②のように心血虚になると脾に対する滋潤・栄養作用が低下し、脾气虚を引き起こす。脾气虚が発生すると生血が低下し心血を補えなくなる悪循環に陥る。

- * このように脾气虚証と心血虚証が相互に影響し合い生じた病証を“心脾両虚証”と呼ぶ。
- * “心脾両虚証”の事を“心脾気血両虚証”や“気血両虚証”とも呼ぶ。



【 症 状 】

- * 心血虚症 + 脾气虚症 (+出血症[慢性])

: 心悸、失眠、多夢、頭暈、健忘、食欲不振、腹部膨満、泥状便、倦怠無力感、顔面萎黄

或いは皮下出血、崩漏、月経量少色淡。 舌淡嫩、脈細弱。

【 治療原則 】 補気養血 (補益心脾)

【 処方例 】

	経絡	意義	取穴部位
脾 兪	膀胱経	補気養血	第11・12胸椎棘突起間、外1寸5分
足三里	胃 経		膝を立て、外膝眼穴の下3寸
三陰交	脾 経		内果の上3寸、脛骨内側縁の骨際
膈 兪	膀胱経		第7・8胸椎棘突起間、外1寸5分
心 兪	膀胱経	養心(安神)	第5・6胸椎棘突起間、外1寸5分
神 門	心 経		手関節前面横紋の尺側、豆状骨の上際で尺側手根屈筋腱の橈側

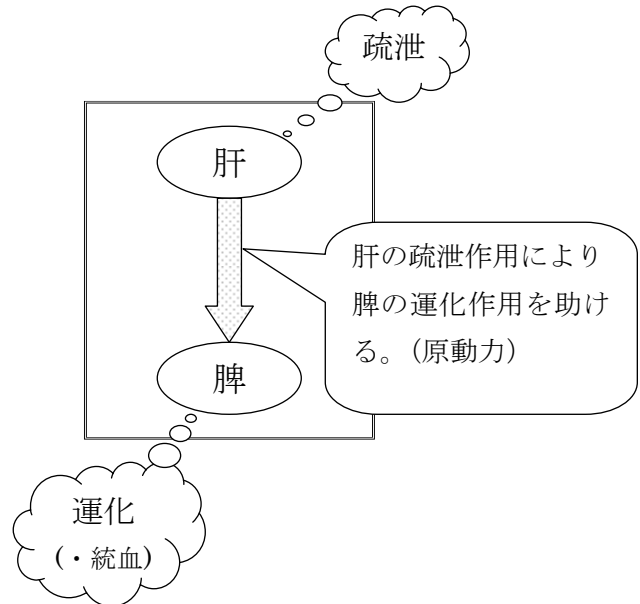
【 臓腑間病証(臓腑兼病) Ⅲ 】

3. 肝鬱脾虚証(肝脾不和証)

: 肝鬱脾虚証とは肝の疏泄作用の失調と脾の運化作用の低下が同時にみられる病証である。

【 生理関係 】

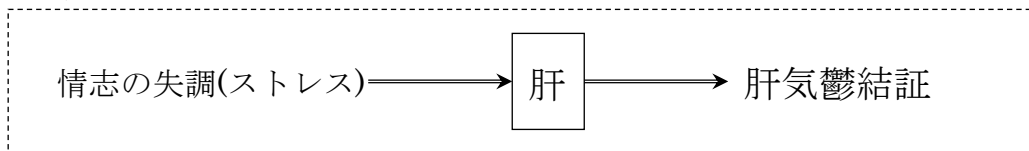
肝は蔵血・疏泄を主り、脾は統血・運化・昇清を主り気血生化の源と呼ばれる。肝脾両臓間では肝の疏泄作用と脾の運化作用の相互関係がポイントとなる。脾の運化作用は肝の疏泄作用に頼っており、肝の疏泄作用が正常であれば脾の運化作用も健やかである。



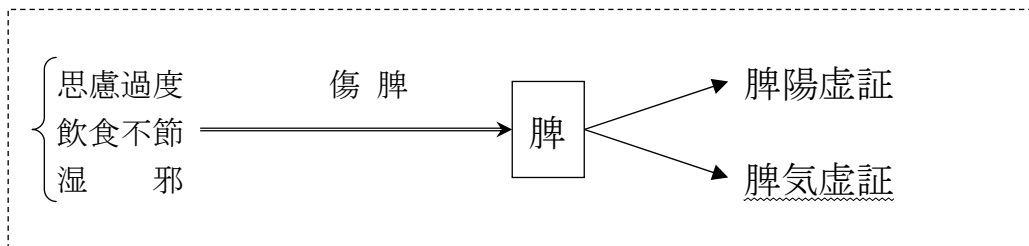
【 病因病機 】

肝鬱脾虚証が発生する原因機序には以下の2通りがある。

① 肝気鬱結証より発生するパターン



② 脾気虚証から発生するパターン



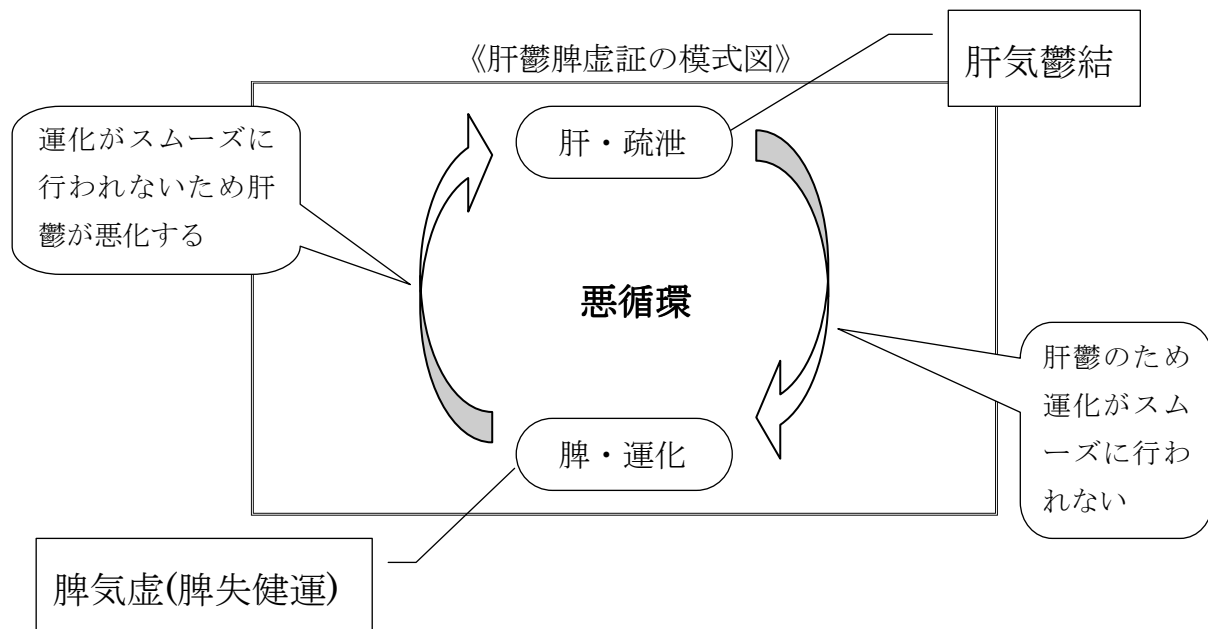
* ①のような機序で肝気鬱結が生じると脾の運化作用の原動力とも言える疏泄作用の低下を引き起こす(脾気虚証)。肝実証が脾虚証を招くので五行の相互関係に当てはめると“木盛乗土”の相乗関係と言える。

②のような機序で発生した脾気虚による運化作用の低下は水穀や津液の停滞を招き気機の失調を引き起こすため肝の疏泄作用に負担をかけ肝気鬱結を引き起こす。

このような機序で肝気鬱結証と脾気虚証が同時に発生している病態を“肝鬱脾虚証”或いは“肝脾不和証”“肝脾不調証”と呼ぶ。

臨床においては②の脾気虚証から肝気鬱結証を招くことは少なく、多くは脾虚が存在している状態で肝気鬱結が生じ肝鬱脾虚の悪循環に陥っていくパターンである。また、脾気虚による運化作用の低下だけでなく慢性化や重いものになると統血・昇清作用の失調にも影響が及ぶ事がある。

前述した五行の相互関係と、肝と脾が解剖学的に同じくらいの高さに存在していることから“肝鬱脾虚証”を“横乗脾土”と呼ぶこともある。



【 症 状 】

* 肝気鬱結症 + 脾気虚症

： 胸脇脹満・脹痛、ため息が多い、気分が不安定でイライラしやすい、納呆、腹脹、泥状便で排便してもすっきりしない、腹鳴・失気を頻発、或いは腹痛・下痢を催し排便後腹痛が軽減する。脈弦或いは緩弱。

【 治療原則 】 疏肝健脾

【 処方例 】

	経絡	意義	取穴部位
太衝	肝経	疏肝理気	足背にあり、第1・2中足骨底間の前、陥凹部に取る
行间	肝経		第1中足指節関節の前、外側爪甲根部
脾俞	膀胱経	補脾健運	第11・12胸椎棘突起間、外1寸5分
章門	肝経		第11肋骨先端下際
足三里	胃経	補後天	膝を立て、外膝眼穴の下3寸

《 肝経五要穴 》

五要穴	経穴名	取穴部位
原穴	太衝	足背にあり、第1・第2中足骨底間の前、陥凹部
絡穴	蠡溝	内果の上5寸、脛骨内側面上の陥凹部
郄穴	中都	内果の上7寸、脛骨内側面上の陥凹部
募穴	期門	第9肋軟骨付着部の下際
背俞穴	肝俞	第9・第10胸椎棘突起間の外1寸5分

《 脾経五要穴 》

五要穴	経穴名	取穴部位
原穴	太白	足の第1中足指節関節の後、内側陥凹部
絡穴	公孫	太白穴の後1寸
郄穴	地機	内果の上8寸、脛骨内側縁の骨際
募穴	章門	第11肋骨前端下際
背俞穴	脾俞	第11・第12胸椎棘突起間の外1寸5分

【 臓腑間病証(臓腑兼病) IV】

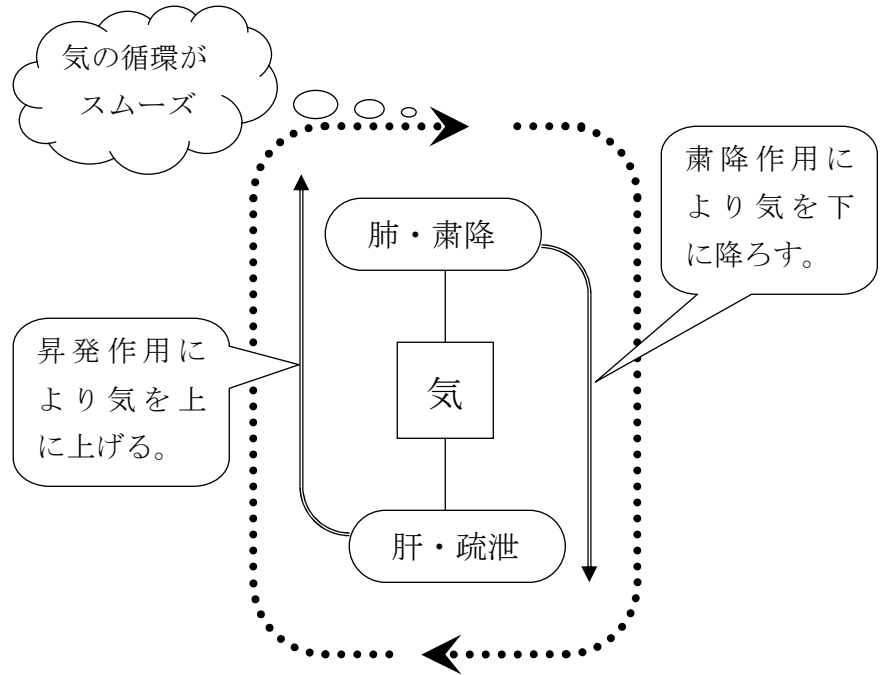
4. 肝火犯肺証

: 肝火犯肺証とは肝火(気)が上逆し肺を犯し、肺の肅降作用の失調が見られる病証。

【 生理関係 】

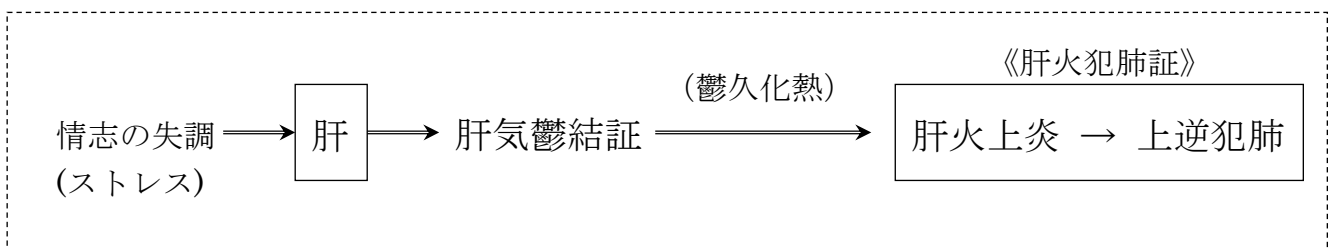
肝と肺の関係は主に気の昇降運動において見られる。肝の昇発作用により気を上に上げ、また疏泄作用により気機をスムーズにしている。逆に肺の肅降作用により気は下に降ろされる。

このように肝の昇発と肺の肅降作用により気の昇降運動が行われ気の循環がスムーズに保たれている。



【 病因病機 】

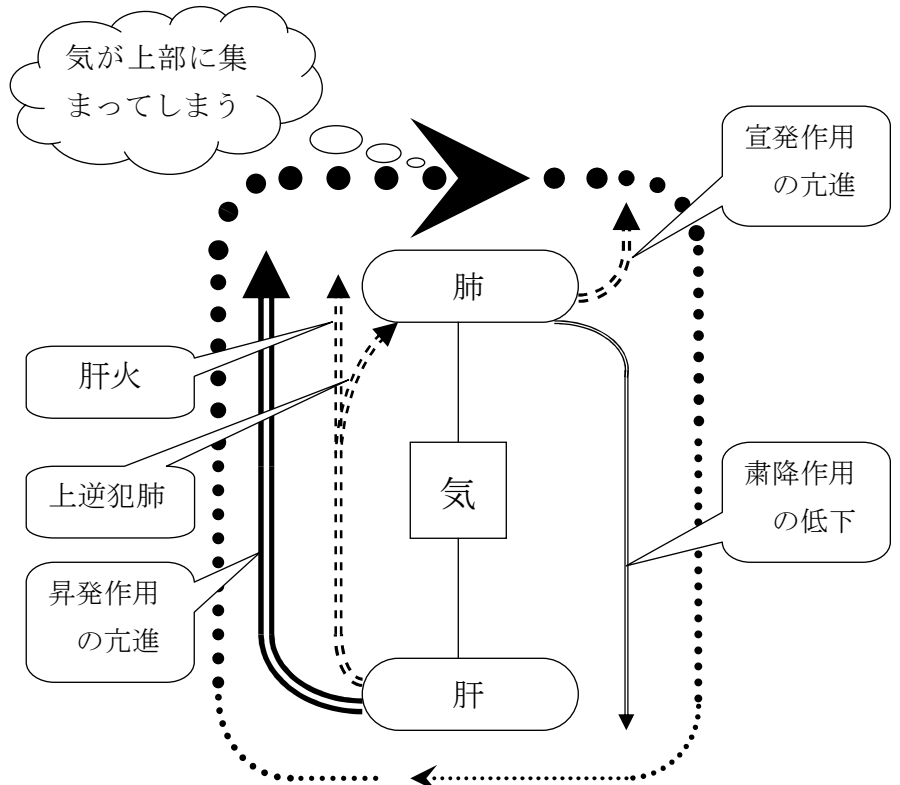
肝火犯肺証は肝気鬱結証から発展し発生する。



上記のように肝火上炎証が生じると肝火の上炎に伴い昇発作用も亢進する。また、肝火が上昇し肺を傷める(上逆犯肺)。肺は肝火により刺激を受け宣発作用が高まり、逆に肅降作用は低下する。このように昇発作用の亢進、肅降作用の低下・宣発作用の亢進が発生し、気の循環に大きな障害が発生する。則ち「昇」(気機の一つで上へ向かう運動)が異常に亢進し、「降」(気機の一つで下へ向かう運動)が異常に低下する、すると気の循環は乱れ体の上部に気が充満し、下部の気は不足する。このように肝火上炎により肺に影響が及び昇発作用と宣降作用の失調が生じた病態を「肝火犯肺証」と呼ぶ。

注意したいのは肝火上炎により肺に失調が起こるのだが、肺は傷つけられて虚証になる訳ではなく肺気上逆の実証となり、肝火犯肺証は虚实挟雑証ではなく純粋な実証であるといえる。故に肝火犯肺証を八綱病証でくくると“裏実熱証”になる。

また、五行の相互関係で説明すると“相侮関係”であり肝が肺を傷つけているので“木盛侮金”或いは特に肝火犯肺証のことを“木火刑金”と呼ぶ。



《肝火犯肺証の模式図》

【 症 状 】

* 肝気鬱結症 + 肺主症 + 実熱症状

: 胸脇灼痛、イライラし怒りやすい、頭部脹痛、眩暈、顔面紅潮、口苦、発作性の咳嗽、甚だしいものは咯血、痰黄粘稠。舌紅、苔黄、脈弦数。

【 治療原則 】 清肝瀉肺

【 処方例 】

	経絡	意義	取穴部位
肝 兪	膀胱経	平肝降火 (清肝)	第9・10胸椎棘突起間、外1寸5分
太 衝	肝 経		足背にあり、第1・2中足骨底間の前、陥凹部を取る
肺 兪	膀胱経	清肺止咳	第3・4胸椎棘突起間、外1寸5分
経 渠	肺 経		前腕前橈側にあり、太淵穴の上1寸。動脈拍動部を取る。

* 上記の配穴に随症選穴を加える。

例 : 咯血・咳がひどい・・・加 孔最
肝火が強い・・・・・・加 行間 等

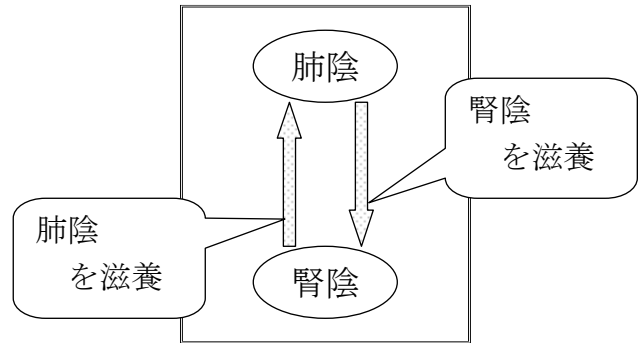
【 臓腑間病証(臓腑兼病) V 】

5. 肺腎陰虚証

: 肺腎陰虚証とは肺腎両臓の陰液不足による虚火の症状が見られる病証。

【 生理関係 】

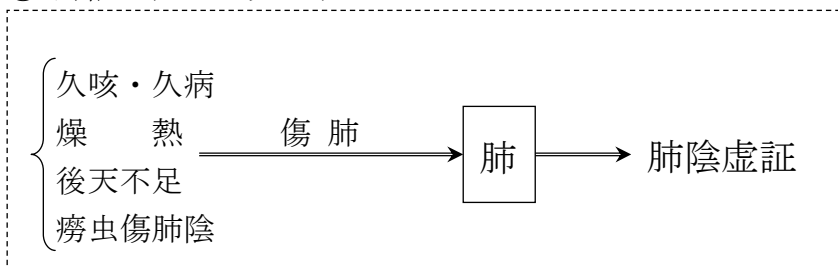
肺と腎との間には陰の相互滋養関係がある。つまり両臓を構成する気血陰陽の4つの物質の一つ肺陰と腎陰の間にお互いを滋養しあう働きがある。この肺陰と腎陰の相互滋養関係を五行に当てはめ「金水相生」と呼ぶことがある。



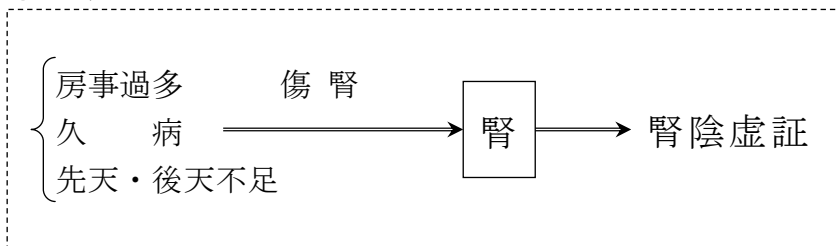
【 病因病機 】

肺腎陰虚証が発生する原因機序には以下の2通りがある。

① 肺陰虚証から発生するパターン



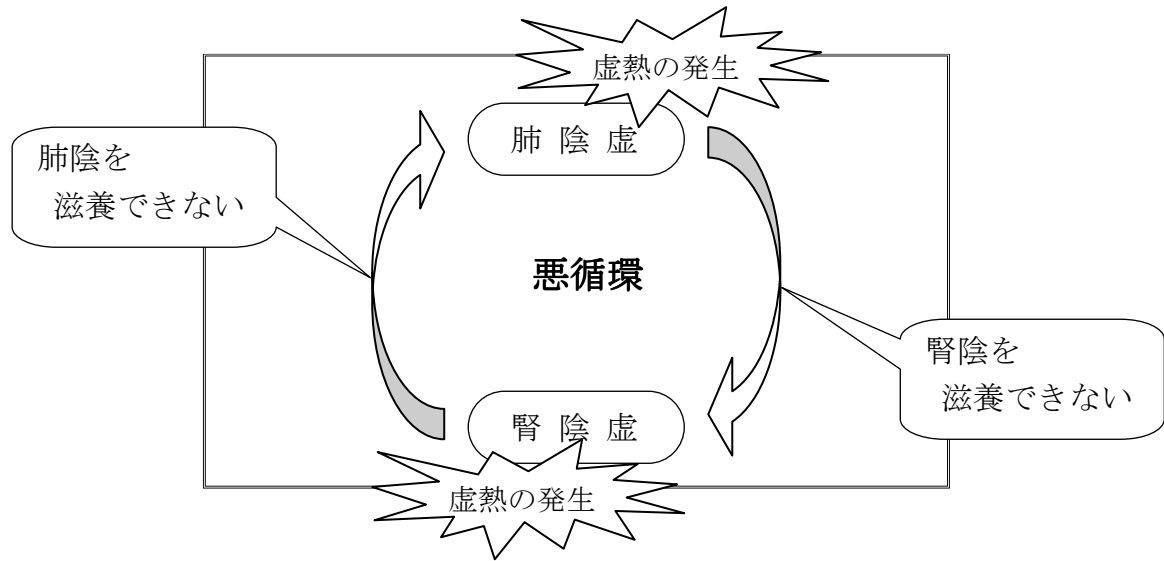
② 腎陰虚証から発生するパターン



* ①のように肺陰虚証が発生すると虚熱が発生し腎陰への滋養が不足して腎陰虚証を引き起こす。腎陰虚証は更に虚熱を引き起こし、また肺陰への滋養が不足し肺陰が更に不足する。このような相互の滋養関係に悪循環が生じた病態を“肺腎陰虚証”と呼ぶ。

また、②のように腎陰虚証から“肺腎陰虚証”が発生する事もあるが、その病機は上述した①から始まるものと同じである。

《肺腎陰虚証の模式図》



【 症 状 】

* 肺陰虚症 + 腎陰虚症

: 咳嗽痰少、或いは痰に血が混じる。口の乾き、喉の渴き、声がかすれる、腰膝酸軟、
或いは骨蒸潮熱、盗汗、頬紅、消瘦、遺精、月経不調、舌紅少苔、脈細数。

【 治療原則 】 滋補肺腎(陰)

【 処方例 】

	経絡	意義	取穴部位
肺 兪	膀胱経	補肺陰	第3・4胸椎棘突起間、外1寸5分
太 淵	肺 経		手関節前面横紋の橈側端陥凹部、動脈拍動部
腎 兪	膀胱経	補腎陰	第2・3腰椎棘突起間、外1寸5分
太 谿	腎 経		内果とアキレス腱の間陥凹部
膏 肓	膀胱経	補虚要穴	第4・5胸椎棘突起間、外3寸
三陰交	脾 経	補後天、生津	内果の上3寸、脛骨内側縁の骨際
足三里	胃 経		膝を立て、外膝眼穴の下3寸

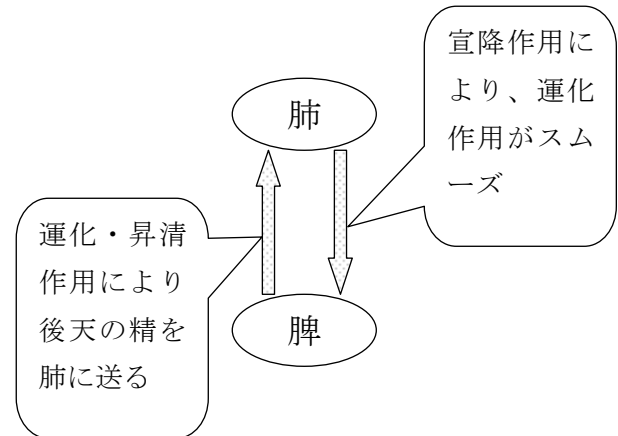
【 臓腑間病証(臓腑兼病) VI】

6. 脾肺気虚証 (肺脾両虚証)

: 脾肺気虚証とは脾肺両臓の気虚により、脾失健運、肺失宣降の虚弱症状が見られる病証。

【 生理関係 】

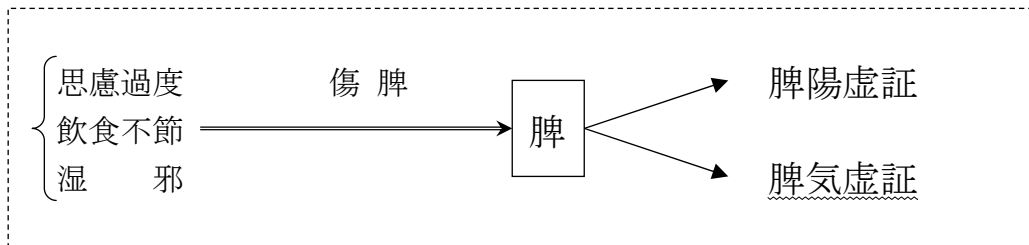
肺の持つ気を上へ外への運動を主る“宣発”と、下へ内への運動を主る“肃降”によって脾の運化作用はスムーズに行われている。また、脾の運化・昇清作用により後天の精は肺に送られ肺を滋養しているという考え方もある。



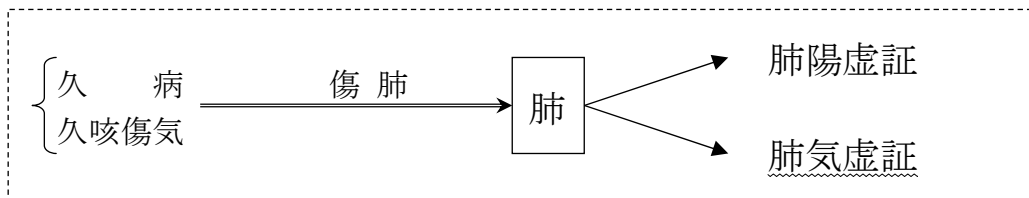
【 病因病機 】

脾肺気虚証が発生する原因機序には以下の2通りがある。

① 脾气虚証より発生するパターン



② 肺气虚証から発生するパターン

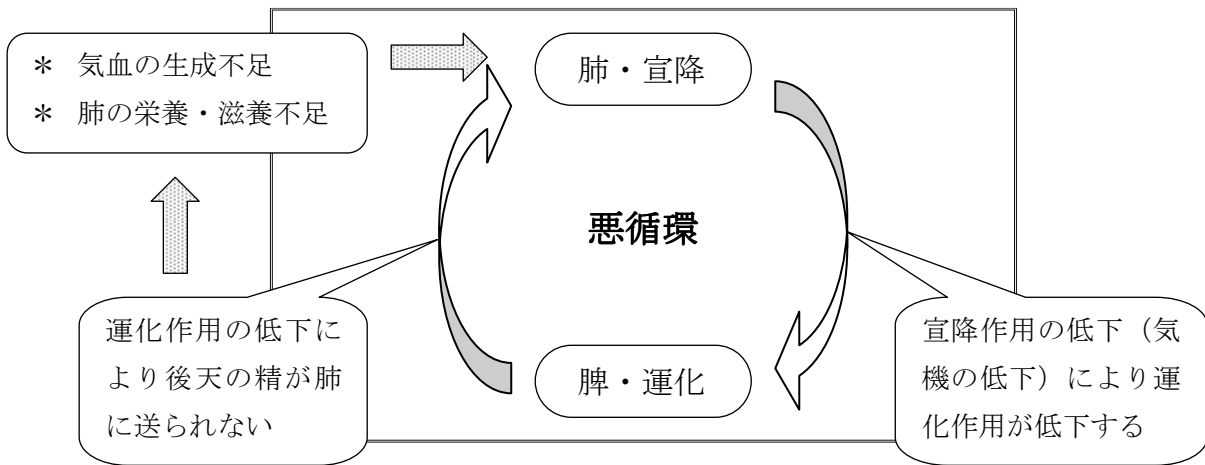


* 臨床では①のような機序で発生した脾气虚証より脾肺気虚証が発生することが多い。脾の運化作用・昇清作用の低下により気血の生成が不足し肺の栄養滋養が低下したり、運化作用の低下により津液の運行が失調し発生した痰飲（脾は生痰の源）が肺に溜まり（肺は貯痰の器）宣降作用を低下させたりして肺气虚証を引き起こす。肺气虚証が発生すると更に宣降作用が低下し、脾の運化作用がスムーズに行われなくなる悪循環に陥る。

このように、脾気虚証から肺気虚証が生じるタイプの脾肺気虚証を五行に当てはめて“土不生金”と呼ぶ。

②のような機序で発生した肺気虚証から発展するパターンもある。宣降作用の低下により運化作用が低下し、肺の滋養が低下し肺気虚証が悪化する悪循環は上記の①脾気虚証から発生するパターンと同じである。これを“上病及中”と呼ぶこともある。

《脾肺気虚証の模式図》



【 症 状 】

* 肺気虚症 + 脾気虚症 (+津液停滞症)

: 食欲不振、腹脹、軟便・泥状便、久咳、短気で気喘、声が小さく懶言、無力感、力が入らない、痰は薄く量が多い、或いは面浮肢腫、顔色は白く艶がない。舌淡苔滑、脈細弱。

【 治療原則 】 補益脾肺(気)

【 処方例 】

	経絡	意義	取穴部位
脾 兪	膀胱経	補脾益気	第11・12胸椎棘突起間の外1寸5分
陰陵泉	脾 経		脛骨内側顆の下、脛骨内側の骨際、陥凹部
肺 兪	膀胱経	補肺益気	第3・4胸椎棘突起間の外1寸5分
太 淵	肺 経		手関節前面横紋橈側端陥凹部、動脈拍動部を取る
氣 海	任 脈	補 気	前正中線上、臍下1寸5分

* 更に 足三里・三陰交 等の経穴を加え後天を補うと良い。

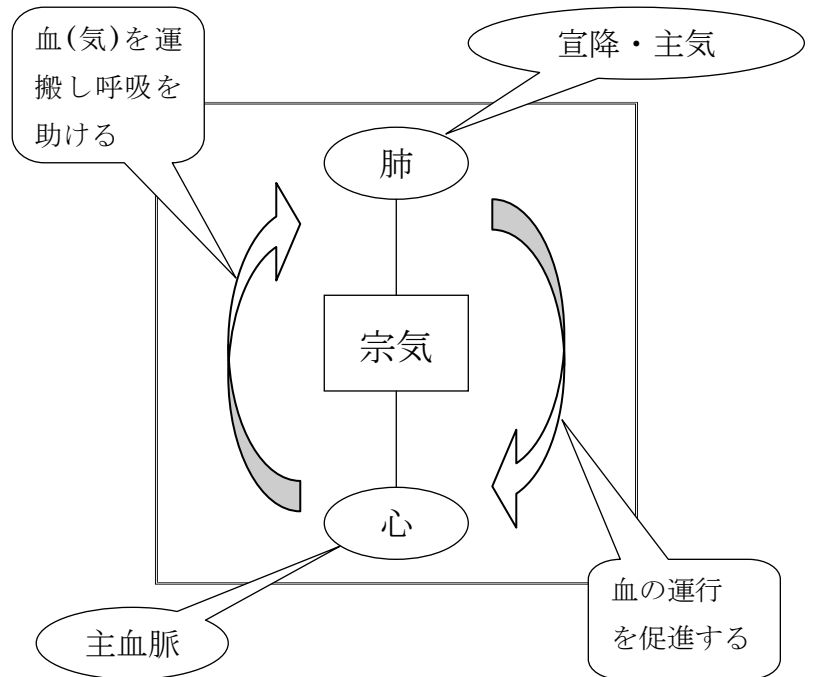
【 臓腑間病証(臓腑兼病) VII】

7. 心肺気虚証

: 心肺両虚証とは心肺両臓の気虚により、心悸・咳喘等の症状が見られる証である。

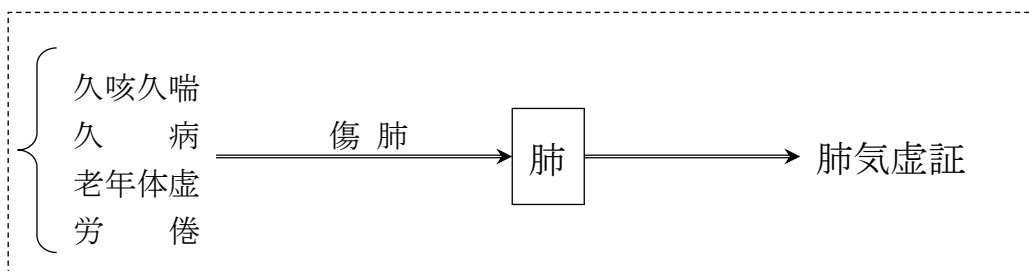
【 生理関係 】

心と肺の関係は主に心の主血脈と肺の宣降・主気、特に心の行血と肺の呼吸を司る働きの関係が重要である。肺は宣發肅降の働きを持ち“朝百脈”ということもあり心の行血作用を促進し、血運行の基本条件とも言える。また、正常な血の運行があつてこそ初めて肺の呼吸機能が維持されるのである。また、心肺両臓の相互関係は心脈に注ぎ呼吸を助ける宗気が中心となり連結している。

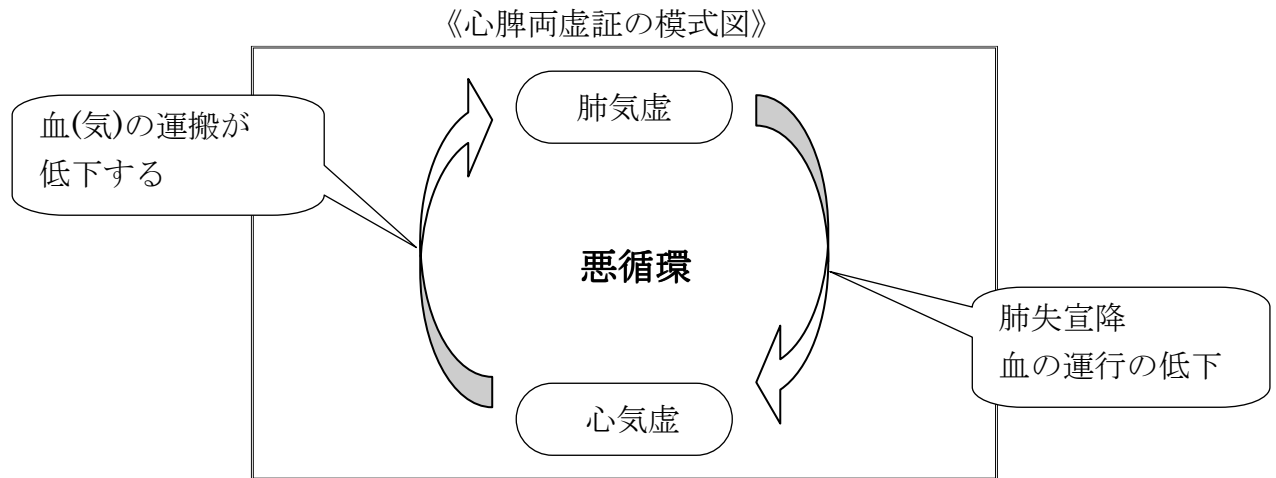


【 病因病機 】

心肺気虚証の多くは肺気虚証から発展し発生する。



上記のように久咳や久病などにより肺気虚証が発生すると宗気の不足が起こり行血の推動力が低下し心の血脈を主る働きに負荷がかかり心気虚証を引き起こす。心気虚により、また宗気不足により行血が停滞すると肺の宣發肅降作用にも負荷がかかり肺気虚がさらに悪化する悪循環に陥る。このように肺気虚証と心気虚証が相互に影響し悪循環に陥っている病証を“心肺両虚証”と呼ぶ。



【 症 状 】

* 心気虚症 + 肺気虚症 (+心脈阻滯症)

: 胸悶心悸、咳嗽、気喘、短気で動くと悪化、眩暈、精神疲労、声が小さい、自汗、力が入らない、顔色淡白、痰は薄い、舌淡或いは唇舌淡紫、脈沈弱或いは結代。

【 治療原則 】 補益心肺(気)

【 処方例 】

	経 絡	意 義	取 穴 部 位
肺 兪	膀胱経	補益肺気	第3・4胸椎棘突起間、外1寸5分
心 兪	膀胱経	補益心気	第5・6胸椎棘突起間、外1寸5分
神 門	心 経		手関節前面横紋の尺側、豆状骨の上際、尺側手根屈筋腱の橈側
膻 中	任 脈	行気活血	前正中線上、第4肋間の高さ
足三里	胃 経	補後天、益気	膝を曲げ、外膝眼穴の下3寸